教養としての歴史教育

――大学における歴史授業の実践報告――

小南浩一

一、はじめに

私は金沢市にある私立の北陸大学で、薬学部の一年次生に「日本近現代史」（半期）、未来創造学部の二年次生に「日本近現代史Ⅰ・Ⅱ」（通年）を教えている。他にいくつかの講義と「演習」及び「ゼミナール」を担当しているが、ここでは、薬学部生を対象とした「日本近現代史」の授業実践（一年次の後期に開講された二〇〇五年の授業を中心に）を学生の反応を紹介しながら報告したい。

〇五年度の薬学部一年次生の定員は四六〇名（〇六年度以降は定員三〇六名）、時間割上、学生は私の「日本近現代史」か他の人文・社会科学系の一科目を選択することになるので、受講生の数はおよそ定員の半分になる。〇五年度は受講生が二〇〇名を超えたので、二つのクラスにわけて同じ授業を二回することになったが、〇六以降は通常の一クラスに戻った。それでも受講生は一〇〇名前後という大人数になるので、私はシラバスの「受講生への指示」の欄に次のように書いている。

一〇〇名前後の受講生が予想されますから、授業は講義が主になると思います。しかし、『考える授業』

を目指しますので、諸君に質問や意見を求める機会を出来るだけ多く作りたいと考えています。毎時間、講義に関する質問・意見・感想を必ず書いて提出してもらい、次の時間に何人かの人のものを紹介し私のコメントをつけます。

二、毎時間、講義に関する質問・意見・感想を必ず書く

毎時間学生に書いてもらう「質問・意見・感想」（以下、「感想文」と略称する）の用紙は、B5版半分の大きさで、用紙の一番上に「授業に関する質問・意見・感想を書いて下さい」とあり、その下に日付、学籍番号、氏名を記入する欄、そして学生がその中に書く長方形の枠が印刷されているものを使用する。文字の大きさによって異なるが、枠は二〇〇字程度書けるスペースとなっている。なかには枠をはみ出したり、裏までびっしりと書いているものもある。また、最初の頃は、氏名のみの空欄も散見された。しかし、授業が進行するにつれて、白紙は全くなくなった。一行でもいいから必ず書きなさいと強調したことと、これが決定的だった思うが、白紙は出席と見なさないと宣言したからであった。

次の授業で、一二～一五人くらいの「感想文」が、A3用紙（縦長）に氏名を伏せて掲載され、全学生に配布される。一〇〇名以上の中から十数人の「感想文」を選ぶ基準はない。心がけているのは、出来るだけ多様な「感想文」を載せることだけである。内容そのものから、授業の方法にかかわるものまでじつに多様で、私はこれを読んで、学生の理解度から関心のあり様を知ることができる。また、自分の授業をふりかえり、点検することも可能となる。

授業の最初にこれらの「感想文」を紹介し、質問に答えることで、前時の復習になる。また、掲載された「感

想文」に対する他の学生の反応もあり、学生同士の意見交換の場ともなっている。例えば、「毎回意見・感想・質問など、言いにくいことも書いて聞けるのでとても良かった。あと、次の講義の際に他の人の意見も読めるプリントを作ってくれるので、自分とは違った意見や考えを知ることができた」とある。あるいは「沖縄の基地問題」をテーマにしたとき、ある学生は「皆の意見を読むとすばらしい意見だと思う。しかし、今回の沖縄のことで言えば、皆同情することはわかる。だからといって、自分の住む市町村に基地を移転すると言われたら、どう思うだろう。沖縄の人達がかわいそうだからと、移転に賛成しますか?また、先生の言われた通りイマジネーションは大事である。しかし、それが行動として表現できないのであれば、意味がないと思う」と書いた。

このように学生は教師に対してだけでなく、他の学生の「感想文」にも反応して自分の意見を述べている。この学生の「感想文」に対して、私は「知る」こと、そして「共感（同情）する」ことは、たとえ「行動」にまで至らなくとも無意味ではない、むしろ、「知る」ことと「共感」することは、「行動」への契機になると答えた。

最初の一五分程度を「感想文」の紹介と解説にあてる予定が、内容によっては盛りあがり、時には三〇分を超えてしまうこともあって、この時間が長すぎるという感想もあったが、総じて「感想文」方式は好評であった。(1)

三、日本近現代史の授業概要

①授業のテーマ

「日本近現代史」の授業で、私は数年前から一九四五年八月一五日のアジア大平洋戦争の終結（敗戦）を破局の「終点」とすれば、その「起点」はどこに求められるであろうかという問題意識のもとで、敗戦にいたる政治過程を時間軸を逆にたどるかたちで授業を展開している。その際、当時の政治状況を検討し、他の選択肢は取り

得なかったのか、どの選択が決定的なターニング・ポイントとなったかなど、「未発の可能性」（色川大吉）を問いかけながら、歴史的思考力を養い、歴史認識を豊かにすることを目指している。

ターニング・ポイント、ポイント・オブ・ノーリターンはどこかを意識することで、授業のメリハリ（目標）を明確にしている。

これに対する学生の反応は、「歴史の授業は過去から現在までの起きたでき事を順番になぞって勉強するやりかたしかなかったので、…面白味に欠けるのが正直なところでした。でも、先生の授業は歴史をさかのぼるやり方だし、それにテーマがはっきりしているのでとても興味が湧いています」。

私は、八月一五日の「起点」を、それまでの日本人の中国観を一変させ、「その後の日本の質を規定し」（宮地正人）、軍国主義的国民国家確立の契機となった日清戦争に想定し、その約五〇年を、大きな近代史の文脈のなかで、中国や韓国など特にアジアとの関係に留意しながら授業を展開している。

したがって、理想としては一五回の授業で八月一五日の起点として日清戦争にまでさかのぼりたいのであるが、何かと「脱線」もするので、実際は一九三一年九月一八日の満州事変までがやっとである。

このようなテーマにした理由は、①学生（特に薬学部に入学する理科系の学生）は、高校で上記のようなテーマをほとんど勉強していない。②本学は、中国人を中心とするアジアからの留学生が多く在籍している。特に未来創造学部では北京語言大学や天津外国語大学など中国の大学生が、三・四年次の二年間を本学で学ぶ編入留学制度があり、三〇〇名以上が在籍している。したがって、アジア人と接することも多く、将来、日本とアジアとの交流がますます盛んになるなかで、学生に過去の日本の歴史を知ってもらい、アジアをはじめ世界の人々と友好的な関係を築いてほしいと考えるからである。

学生の感想文にも「戦争についてもっと知りたいです。どうして始まったのか、どうやって終わったのか。戦争を止められるかもしれなかったポイントをもっと学びたいです」とある。

②オリジナルの講義テキスト

私は今まで、講義では毎回、レジュメと史料プリントを配布していたが、史料プリントも多く、また、前回配ったプリントを欠席した学生が持っていないこともあって、二〇〇二年度に、オリジナルの「講義テキスト」を作成した。見開きの左ページが講義要目（レジュメ）で、右ページは余白とし、ノートとしても使えるようにした。基本的な「史料」もすべてその一冊に収録した。総頁数七八頁のもので、印刷屋で簡単な表紙をつけてもらい、学生には実費（五〇〇円）で購入してもらうことにしている。

しかし、「講義テキスト」を使用するようになっても、「感想文」用紙の他に、史料プリントや新聞記事のコピーなど平均三〜四枚のプリント（毎年、配布するプリントは違う）を配布することになるので、時間の節約上、授業開始の五分ほどまえにプリントを並べておき、学生に各自とってもらうことにしている。

③講義の概要

半期一五回分の講義概要は以下のとおりである。

第一回　序論

［テーマ］歴史とは何か、記憶とは何か。

［概　要］　・国民的記憶

・人民の記憶と国家の記憶
・クローチェ「すべての歴史は現代史である」、E・H・カー「歴史とは現在と過去の対話である」、ワイツゼッカー「過去に目を閉ざすものは、結局のところ現在にも盲目になる」、ミラン・クンデラ「権力に対する人間の闘いとは忘却に対する記憶の闘いにほかならない」

第二回・第三回

［テーマ］一九四五年八月一五日に戦争を終わらせる力が天皇にあったのであれば、そもそもなぜ天皇は戦争開始の許可を下したのか？

［概　要］・ターニング・ポイントとしての日独伊三国軍事同盟
・九・六御前会議における天皇発言
・天皇の戦争責任問題と『天皇独白録』

第四回・第五回

［テーマ］アメリカはなぜ原爆を投下したのか？　原爆投下の政治学

［概　要］・「ヒロシマ　あの時、原爆投下は止められた」（二〇〇五年、TBSと英国BBCの共同制作）を視聴
・原爆投下に関するアメリカ人の認識
・一九八五年　シンポジウム「ヒロシマ　五〇万人のアメリカ人の生命が救われたという奇妙な神話」
・一九九五年　スミソニアン博物館での原爆展中止

第六回・第七回

［テーマ］アジア大平洋戦争と沖縄

［概　要］・「捨て石」としての沖縄戦、集団自決はなぜおこったのか

・戦後五〇年を記念して制作されたビデオ「ドキュメント　沖縄戦」（一九九五年）を視聴

・沖縄と現代　―沖縄県民の天皇観、「日の丸」「君が代」、基地問題

第八回・第九回

［テーマ］終戦の政治過程、戦争はなぜもっとはやく終結できなかったのか？

［概　要］・近衛上奏文の意味

・ソ連はなぜ日ソ中立条約を破って、対日参戦したのか？

・ソ連参戦が引き起こした中国残留孤児、シベリア抑留問題

・ポツダム宣言と御前会議、「聖断」とは何か？

第一〇回・第一一回

［テーマ］一五年戦争の起点となる満州事変はなぜ、どのような理由で勃発したのか？

［概　要］・一九二〇年代の中国の国権回復運動、北伐と田中義一内閣の対支強硬外交

・石原莞爾の満蒙領有論と石橋湛山の満州放棄論

・メディアは戦争をどう伝えたか、満州事変と新聞報道

第一二回～第一四回

［テーマ］中国から見た日中戦争　―柳条湖・盧溝橋・上海・南京―

［概　要］　・満州国と華北分離工作
・「抗日救国のために全同胞に告げる書」（八・一宣言）
・全国各界救国連合会　抗日救国の初歩的政治綱領（一九三六年六月一日）
・西安事件と張学良―ビデオ「張学良が語る日中戦争」（ＮＨＫ、一九九〇年）を視聴
・南京事件について

第一五回　筆記試験

四、教養としての歴史教育

さて、「日本近現代史」の授業を「教養としての歴史教育」として意図する理由は何か。教養とは、例えば戦争に捲き込まれない知性、あるいは現実を相対化し未来を構想する想像力とするならば、歴史学こそそうした教養を培う学問であると考える。故網野善彦は、「歴史学とは過去を研究することで、現代人である自分を拘束している見えない権力の働きから自由になるため」の方法、即ち「意識を解放するための方法」でなければならないと言っていた。(2) 大きな目標としては、こうした歴史学の一端を少しでも学生に体得させ、彼らに、今ある現実に対応できる能力を身に付けさせるだけでなく、現実を相対化し、よりよい未来を創造する構想力を身に付けさせることが大学教育の使命であると考えるからである。

「教養としての歴史教育」の目的は、まず学生の持っている歴史学に対するイメージの転換をはかることである。学生は歴史とは教科書を覚える（暗記する）ものだと考えている。しかし、教科書はそれを書く歴史家によって違う。十人の歴史家がいれば十通りの歴史書が存在する。歴史とは歴史家が自分の全存在をかけて創り出す

「過去の再生」である。また、国家や民族によって書かれる歴史書には違いがある。こうした事例は「国民的記憶」の問題として後述する。

もちろん、歴史学においても理解し記憶するというプロセスは重要であるが、学生の「歴史」＝「暗記物」という固定観念を払拭するために、記憶に頼る試験ではなく、調べて考える試験として、下記のような試験問題を、試験のおよそ三週間ほどまえに提示し、自分で調べ、考えて答案をつくっておくように指示している。そして、授業は必ず出席して、私の話を集中して聞いて、感じ、考え、面白かったことを記録して欲しいと強く要請している。

試験問題

以下の設問の中から、二つを選択して文章で答えなさい（選択番号を明記すること、それぞれ一〇行程度）。

一．対米英戦争の開戦過程における昭和天皇のかかわりについて述べ、あわせて天皇の戦争責任について論ぜよ。（特に一九四一年九月六日の御前会議について）

二．アメリカ側の原爆投下の理由について説明せよ。こうしたアメリカ側の見解に対して批判的に論ぜよ。

三．一九四五年八月一五日の敗戦を破局の終点とすれば、その起点をどこに求めるべきか。あなたの見解を書け。

四．①、②のいずれかを選択せよ。

①歴史を学ぶことはどのような意味があるのか、あなたの見解を述べよ。

②学生の感想の中に「この講義を聴いて、今までの歴史学のイメージが大きく変わった」とあったが、今までの歴史学のイメージとはどのようなもので、それがどのように変わったのかを具体的に書け。

五．三国同盟条約の締結が一九四一年一二月八日の対米戦争を避け得ないものとしてしまったといわれるのはなぜか。その理由を書け。

六．日清戦争が近代日本の針路を決定したとの見解について説明し、こうした見解に対するあなたの考えを書け。

七．一九四五年八月一五日の敗戦に至るプロセスで、天皇やその側近、政府、軍部はなぜ戦争をもう少しはやく終結させることができなかったのか。どの時点でどういう選択肢をとっていれば、もう少し被害は防げたと考えられるか。あなたの見解を述べよ。

八．一九四一年一二月八日、一九四五年八月六日、同八月九日、同八月一五日、あるいは、一九三一年九月一八日、一九三七年七月七日、最近では、二〇〇一年九月一一日など、歴史を「記憶する」とはどのような意味があるのか。あなたの見解を述べよ。

九．満州事変におけるメディア（特に新聞）の役割について論ぜよ。

一〇．今回のテスト範囲のなかで、自分で、上記のような問題を設定してその解答を記せ（問題と解答の両方を書くこと）。

学生の「感想文」に「私の中では歴史＝文字の暗記という考えしかなかった。しかし、戦争や条約一つ一つの裏にはそれぞれの国や人々の思惑、事情が隠れていることを知った。残りの講義を通じてもっと深く歴史を知り

たいと思う」。

最後の授業の感想文に「…歴史の授業の理想は、この授業のようなものだと思う。今までは憶える歴史だったが、これは考える歴史だった。歴史を学んでそれをきっかけに自分を考え、日本を考え、世界を考えることは素晴らしいと思う。やっぱり歴史は面白いと思う」。

五、歴史とは各国別々ではなく、共有されるもの

なるほど歴史は民族や国家によって、銘記されるべき歴史的事件は違う。しかし同時に、一国の歴史や民族の歴史は、他の国、他の民族との相互の影響（関係）の歴史でもある。入江昭は、「他の国が自分の国をどうとらえ、どのように理解しているかを認識するのも、歴史研究上、欠かせない視野」であり、「お互いがお互いの運命とどう関わっているのかを探る。それが歴史を学ぶ根本的な目標」だと言う。したがって、「歴史というものは決して各国別個のものではなく、世界中すべての人々に共有されるものだ」と主張している。(3)

こうした観点から、日中戦争における中国側の視点を意識した授業構成をとっている。

学生は「今まで教わってきた歴史はあくまで日本人から見た歴史にすぎないということに驚きました。歴史を学ぶことは現代を知ることに必要だという話はよく聞きますが、その意味が少し分かったような気がしました」。別の学生「いつも日本を中心に戦争を考えていたけど、今日の授業のように中国や韓国など他の国の立場に立って考えてみることも大切だと思った。歴史の見方が少し変わった気がした」。

あるいは「あらためて中国のことは何も知らないんだと思った。その上、日本が中国にしたことすら知らないで、中国人の反日運動のニュースを聞いているなんて、こわいと思った。小・中・高の歴史の授業は歴史を単語

でしか、習っていなくて、やっぱり日本の授業のあり方を変えなくてはいけないと思う。この授業で満州事変などの日本側の詳しいことが分かったので、中国側の書物や中国の教科書がどれくらいのレベルまでのっているのか知りたくなった」。

○五年度の授業は後期から始まり、一〇月一七日に小泉首相の靖国参拝があったので、こうした「感想文」が多くあった。教員としては、こうした学生の意欲を、学生自らが調べる地点にまで引き上げるにはどうすればいいかということが次の課題となる。

六、第一回目の授業が勝負

どの講義もそうだが、第一回目の授業は極めて重要である。新入生に高校までの「暗記物としての歴史」を一掃させるべく全力を傾注している。

第一回目のテーマは国民的記憶である。例えば、一九四五年八月一五日は何の日か。これはほとんどの学生が答えることが出来る。八月六日の広島や九日の長崎の原爆投下も八割程度の学生は答えることが出来る。これらの日は、新聞やテレビなどでも報道され、日本の国民にとって決して忘れてはならない日として記憶されている。しかし、その原因となった対米英戦争がいつ始まったのかは、ほとんどの学生が知らない。一方、開戦記念日となった一九四一年一二月八日（アメリカ時間では七日）は、年配のアメリカ人にとっては「リメンバー・パールハーバー」として強く記憶に刻まれている。また、その背景にある日中戦争の一九三七年七月七日、満州事変の一九三一年九月一八日を答えることのできる日本人学生は皆無である。ところが、本学に在籍する中国人留学生のほぼ九割がその年月日を答えることができる。この違いはどこからくるのかと学生に問いかけている。同じ歴

史的事実に対して日本と中国とで、なぜ記憶の仕方が異なるのかと問いかけ、「歴史認識」とはどのようなものかを考える契機としている。(4)

故加藤周一は「ある社会が、たくさんの過去の経験の中から何を記憶し、何を忘れるがままに任せるのか？という主題、言い換えれば『記憶の選択』という主題は、常に現在の問題」(5)であると指摘したが、単に「被害」と「加害」という問題だけではない。「記憶の選択」の問題は、国家の記憶と「人民」の記憶が決して同じではないことに留意すべきである。むしろ、人民の記憶が国家の記憶によってすり替えられてしまうことを銘記すべきだと思う。歴史学は人民の記憶を課題とすべきだと言った鶴見俊輔の言葉に私は共感する。ヒットラーは大衆は無知で愚かだが、忘却の才能だけはあると喝破した。これに対抗する論理がクンデラの「権力に対する人間の闘いとは忘却に対する記憶の闘いにほかならない」という言葉である。

沖縄戦の「集団自決」をめぐり、日本軍の強制を示す記述が教科書から削除された問題は、まさに国家の記憶と人民の記憶の「対決」を示す事例とも言えよう。

七、第一回目の授業に対する学生の「感想文」

国民的記憶について学生は、「大平洋戦争において日本、アメリカ、中国での記念日の認識の違いに驚いた。どの国も自分に都合の良い事を「選択して」覚えているものだと思った。自分が受けた被害ばかり主張する前に、相手国に自分が何をしてしまったかを忘れてはならないのだと思った。そういう気持ちでこれから授業を聞いていきたいと思った…」。また、別の学生は「開戦記念日のこと、初めて知った。歴史の授業、今まで受けた中で一番楽しかった。終戦と敗戦、聞いたときに全然イメージがちがう。しっかりと事実を知りたい。うらにあるの

を知りたいと思った。なんでこんなことが起きたのか、原因、背景を知らないと、歴史から学ばないと、同じことが起きる。知らないことはこわいことだと思ったので、一五回の講義で集中して、少しずつ知っていこうと思った。本や新聞も少しずつ読むようにしたいと思った。正しいことなのか、そうじゃないのか、しっかり見極められる人になりたいと思いました」。こうした学生の感想は、少し幼いが、彼らの柔軟な心や、向上心、意欲がうかがえ、これにどう応えるか、教員の責任の重さを感じる。

私は最初の授業で、テレビのニュースや新聞を必ず見ること、図書館を毎日利用して、数種類の新聞を見ることを強調している。歴史は現在と全く関係のない過去の出来事ではなく、現在と密接に関わっていることを理解させたい。否、むしろ過去が現在を規定している（死んだ人が生きている我々現代人を動かしている）事実を戦後補償や靖国参拝問題などを通じて理解させたいと念じている。

八、おわりに

第二回目以降の授業展開と学生の反応については別の機会に譲るが、最後に授業実践上の二・三の問題について言及したい。

①ビデオ教材について

年度によって若干異なるが、私の講義では概要で示したように三本程度のビデオを視聴している。特に「ヒロシマ　あの時、原爆投下は止められた」は、原爆を投下するアメリカ側の事情が描かれ、投下が避けられる可能性のあったいくつかターニング・ポイントをドラマ仕立てに描いていおり、「未発の可能性」を追究する本授業

のテーマにふさわしい教材であった。

「ビデオに目がくぎづけになった。是非、最後まで見たい。ビデオの中で博士は謝罪しないと言っていたが、『ごめんなさい』と頭を下げる勇気を持って欲しい」。別の学生は、「私たちの時代は国を超えた、人間としての人間らしい価値観を探っていき続けるべきだと思いました。原爆の恐ろしさを世界の人々は必ず知る必要があり、日本人として伝える責任があると感じました」と書いている。原爆投下を日米当事国だけの歴史的経験とせず、人類の普遍的な問題として捉えようとしている。

もう一つのビデオは「張学良が語る日中戦争」である。身柄を解放された張学良が、ＮＨＫの単独インタビューに応じたもので、当時、九〇歳という高齢にもかかわらず、「歴史の証人」としての発言は迫力に満ち、学生の心を捉えたようである。

「やっぱり戦争をリアルに体験した人の言葉は心にひびくものがありました。まして張学良は本当の父親が殺されてしまったり、父親の跡を継ぐ形となり大きな重荷があったりと、本当に苦痛だったと思います」。また「ビデオの中で『親の仇は天の仇より憎し』と言っていたが、それでも親が殺されたのに暴走せず、ちゃんと周りの状況を見て行動していたのはすごいと思った」。あるいは「ビデオで張学良が『父は日本と組むつもりだったのに、日本に殺された。私は絶対にそんな日本とは組まない』と語っていた。当時を実際に経験した人の言葉はとても心に残ります。一つの事件を立場を変えて見ることにより、それぞれの考えを知ることができるので大変興味深いです」。

②板書

「黒板にもっと詳しく授業内容を書いてほしい」、また「黒板のどこをノートにとればいいのかわからなかった」などの「感想文」が散見される。私は、常々学生に言っている。皆さんのオリジナルのノートを作って下さい、漫然と板書をノートに写すだけでなく、皆さん各自の判断で、板書にない事項も取捨選択してノートに書いてほしいと。私がパワー・ポイントを使わないのは、この授業で、私の下手な文字を判読できれば、どんな文字も読めるようになるし、また板書にない事項をどうノートにとればいいかを練習するためだと半ば開き直って言っている。学生は「パワー・ポイントを使っている授業で配布されるコピーに対して抱いていたモヤモヤの理由がわかって少しスッキリした」と書いていた。

③教員の話法

私は、受講生が一〇〇名を超えるような授業では、教員は舞台で演じる演者の側面があると思う。舞台は演者と観客の合作といわれるが、授業もまた教員と学生がともに創り上げる側面がある。私の場合、学生の「感想文」が私の授業をつくる。私はよく学生に言う。今日のこの授業は一回限りのもので、二度と同じ授業はできません、皆さんの反応で私の授業は変わりますと。

○五年度は上述の通り、二つのクラスで基本的には同じ内容の授業をしたが、一つのクラスで深められたテーマが他のクラスではほとんど触れられなかったこともある。取りあげる「感想文」が違うため、最初から違うスタートとなる。

そこで、舞台の演者はなんといってもそのよく通るハリのある声が要請される。一方的で抑揚のない話し方では、わが北陸大学では通用しない。声の勢いやトーン、話し方の緩急や落語でいう「間」の取り方等は、話法の

重要な要素であるが、総じて大学の教員はそうした意識が希薄である。

もちろんこれは個性の問題でもあり、練習すれば必ず改善されるというものでもない。帝京大学の森谷公俊氏は、学生の発表の仕方や技術について指導するため、自らカルチャーセンターの朗読講座に通った経験を書いているが、[6] 教員のボイストレーニングなどは、必要ではないかと思う。いずれにせよ、どんなにオリジナルな研究成果も、その一端でも学生に伝わらなければおよそ意味がない。「真理の探求にばかり熱心で、その伝え方には無関心である」といわれないように自戒している。

(1) こうした感想文方式は多くの教員が採用しており、とりたてて新しいものではない。笠原十九司「大学の授業方法について」『歴史評論』一九九六年九月号などがある。ただ、毎時間書かせて、一二〜一五人くらいの「感想文」をプリントにして全員に配布する例はあまりないようである。

(2) 中沢新一『僕の叔父さん　網野善彦』集英社、二〇〇四年、七〇頁。

(3) 入江昭「『歴史』とは何か」『朝日新聞』二〇〇一年六月七日。

(4) こうした実践は、名古屋大学で新入生の意識・認識に関するアンケート調査を実施していた安川寿之輔氏の実践に学んでいる。同著『大学教育の革新と実践』新評論、一九九八年、一四一〜一八六頁。

(5) 「二〇世紀最後の八・一五 ㊤ 加藤周一氏に聞く」『神戸新聞』二〇〇〇年八月一二日。

(6) 森谷公俊『学生をやる気にさせる歴史の授業』青木書店、二〇〇八年、三三〜四三頁、二二一〜二三二頁。

「追記」　学生の「感想文」は、すべて二〇〇五年度のもので、誤字脱字は訂正しているが、それ以外はそのまま引用している。